

企業名：株式会社オハラ

---

レポート名：オハラレポート 2022

---

### 1. この会社が目指す姿が理解できるか

株式会社オハラは「ひかる素材で、未来をひらく」というブランドスローガンを掲げており、光事業とエレクトロニクス事業の2つの分野においてガラスの生産を行なっている。「経営理念」、「コーポレート・メッセージ」によって長年培われてきた株式会社オハラの経営の軸と、現代社会における役割を理解することができる。また、コーポレート・メッセージを体現するにあたっての長期ビジョン 2035、付随する中期経営計画によってオハラが目指す姿は詳細に描かれている。しかしながら、経営理念/コーポレート・メッセージの掲載されているページ(P2)と、長期ビジョン 2035/中期経営計画の掲載されているページ(P9-12)が離れていることから、関連を意識しづらい。また、コーポレート・メッセージにおけるピラミッド図(\*1)についての説明がなく、コーポレート・メッセージ内でメッセージが混在しているようにも見受けられてしまう。コーポレート・メッセージと長期ビジョン、中期経営計画の構造がより分かりやすく示されれば、オハラの目指す姿を芯の通ったものとして伝えられると考える。

### 2. この会社の競争優位性が理解できるか

統合レポートにおいて最重要であるのは、自社の価値がどこから生まれているのか、というストーリーをステークホルダーに分かりやすく伝えることである。株式会社オハラはこの点について、「オハラの価値創造」というページ(P7,8)で解説している。図表の形式で表現されているため、直感的に理解しやすく、株式会社オハラの組織としての能力がいかに事業分野、そしてコーポレート・メッセージに繋がっているかというストーリーがよく説明されている。また、「価値創造の歴史」(P3)では航空・宇宙分野においてオハラの製品が用いられたことが強調して示されていることから、光学・特殊ガラスという事業分野そのものが特殊であり、そこに競争優位性があると捉えられる。

### 3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

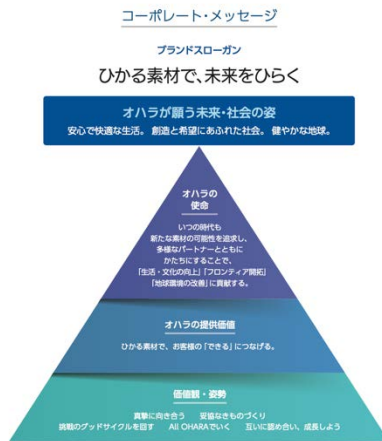
株式会社オハラは中期経営計画(P11)を策定しており、5つのテーマ(\*2)で活動内容と目標を定めている。うち2つは「価値協創による新ビジネス創出」と「価値創造力・効率性・収益力向上」であり、既存の事業に依存せず、新たな価値を生み出そうとしているオハラの姿勢が窺える。また、創立当時から独立した研究部門が設置されていることも、オハラの強みだと述べられている。光事業・エレクトロニクス事業においては、基礎研究に基づいた最先端の技術開発で、この先も競合他社をリードしていけると期待できる。

#### 4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

統合株式会社オハラの人的資本に対するアプローチは、「従業員」のセクション(P21)から理解することができる。5つの価値観・姿勢を掲げ、協働を促す研修を行っており、組織の新陳代謝を進める旨などが記されている。しかしながら、株式会社オハラで働く人々の役割やそれぞれの人々が実際にどのように「協創」しているのかが見えてこない、という点で、人的資本の価値向上をイメージすることは難しい。統合レポートの、価値創造の構造の説明と長期的な企業価値の説得、という本来の趣旨としては必要とされていない事項ではあるが、どの分野でどのような人材が活躍し価値創造に取り組んでいるのか、という内容があれば、人材不足の加速する社会で、ステークホルダー並びに就職を志す学生に自社の魅力をアピールできるだろう。

#### 5. 報告書にはどのような改善余地があるか

上記で述べたものを一例として、オハラレポートには言及されるべき要素がいくつか欠けている。参考として、競合他社であるタムロン社の統合レポートと比較した。1点目として、人材戦略の解説が不十分である。近年投資家などから重要視されているESGの指標について、オハラレポートでは主にE：環境について述べられている。生産過程における環境への配慮とともに、環境改善に寄与する製品開発を行っているのがオハラのユニークな点ではある。しかしながら、タムロン社はダイバーシティへの取り組み等も言及しているのに対し、オハラのレポートではS：社会への貢献度に物足りなさを感じる。2点目としては、リスクマネジメントの観点が見られないことが挙げられる。中長期的な成長戦略が明記されていることから、オハラレポートから競争優位性の持続性を読み取れる、と述べた。しかし、中期計画を遂行するにあたって、社会情勢の変化がどのように事業に影響し、どう対策を打つべきなのかというリスクと対処までは熟考されていない、もしくはレポートに記載されていないことは課題である。オハラレポート内でも「先の見通せない時代である」ことが述べられているが、未曾有のコロナ禍などを経験した今、リスクマネジメント能力の強化は同社の長期的な価値評価をより高めるだろう。



\*2

テーマ	主な活動内容
オプティクス技術への貢献	<ul style="list-style-type: none"> <li>● モバイル・モビリティ・メディカル分野での拡販</li> <li>● 半導体・FPD露光装置、5G投資等の需要獲得</li> <li>● 技術進化に貢献する材料開発、製品/ソリューション拡充</li> </ul>
価値協創による新ビジネス創出	<ul style="list-style-type: none"> <li>● グローバル市場開拓、サプライチェーン構築</li> <li>● お客様、加工先様と三位一体の戦略推進</li> </ul>
価値創造力・効率性・収益力向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 人材多様化促進、生産性向上、挑戦文化の醸成</li> <li>● グループ管理会計の強化</li> </ul>
コア組織能力・コアプロセスの強化	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 次世代成長戦略につながる研究テーマの拡充</li> <li>● 新規事業領域の部材ニーズを実現する生産技術確立</li> <li>● 新素材の品質・性能を保証する測定手法の拡充</li> </ul>
社会課題・環境問題への取組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>● GHG（温室効果ガス）排出量削減</li> <li>● 環境配慮型製品の開発・事業化</li> </ul>

[参考資料]

オハラレポート 2022 (最終閲覧日：2022 年 7 月 19 日)

<https://www.ohara-inc.co.jp/wp-content/uploads/2022/01/report2022.pdf>

CCL. 「統合報告書 何のために作る？」(最終閲覧日：2022 年 7 月 19 日)

[https://consult.nikkeibp.co.jp/ccl/atcl/20191226\\_2/](https://consult.nikkeibp.co.jp/ccl/atcl/20191226_2/)

株式会社タムロン 統合報告書 2022(最終閲覧日：2022 年 7 月 20 日 )

[https://www.tamron.co.jp/ir/upload\\_file/m005-m005\\_05/All2022.pdf](https://www.tamron.co.jp/ir/upload_file/m005-m005_05/All2022.pdf)